

スポーツとリスクに関する文化論的研究

尾川 翔大 (スポーツ危機管理研究所)

野井 真吾 (教育福祉系)

本研究プロジェクトは、「スポーツとリスクに関する文化論的研究」と題するもので2019～2020年度にかけて遂行された。本研究プロジェクトの大きな目的は、人文・社会科学の領域でリスクとスポーツに関する研究を進めていくための土台造りをするところである。日本でスポーツとリスクに関連する研究は、日本のスポーツ界を分析する方向性で法学やマネジメントの領域で進められているが、そのためには、マネジメントすべきリスクについても理解を深めておく必要があるのではないだろうか。このように考える本研究プロジェクトは、法学やマネジメントの領域で進められてきた日本におけるスポーツとリスクに関する研究を補完する意味がある。

今年度は、社会学の立場からリスクを論じるにあたり頻りに言及されるドイツの社会学者U.ベックのリスク社会論を主要な参照系としながら、リスクとスポーツの研究の土台造りをするをを試みた。これまでの日本におけるスポーツ社会学的研究において理論的な面での参照点とされてきたものは、M.フーコー、P.ブルデュー、N.エリアスが多かったのではないだろうか。これに加えて、ベックのリスク社会論もスポーツ社会学の研究を進めるための有用な参照点となるのではないだろうか。このような見通しのもと、まずは、ベックのリスク社会論を理解することを試みていった。そして、ベックの理論そのものの全体像を検討するもの¹⁾や、ベックの社会理論を土台にして日本社会を分析する研究²⁾も蓄積されていることを確認していった。ここから、ベックのリスク社会論を土台にして日本におけるスポーツを社会学的に研究することへ拡張することには一定の妥当性があると判断するに至った。

さらに、ベックのリスク社会論が世界的な注目を集めたのは1980年代後半であったが、21世紀に入って以降、日本の社会学系の学術誌では、ベックの理論をテーマにした特集が定期的に組まれていることも確認することができる³⁾。したがって、ベックのリスク社会論は、時代診断を下すにあたり、今なお有効性を

保っているとみなすことができるのではないだろうか。こう考えてよいならば、日本のスポーツの現状を理解するにあたって、ベックのリスク社会論は参照されてよいように思われる。

リスクとスポーツに関する社会学的研究には、英語圏で一定の蓄積がある。しかし、リスクとスポーツの社会学的研究を進めるにしても、すでにジュリアノッティは、スポーツ研究において「ベックの分析は驚いたことにインパクトがほとんどない⁴⁾と指摘していた。しかし、同時にジュリアノッティは、ベックのリスク社会論に立脚したスポーツ研究のアジェンダを提示してもいた。したがって、ベックのリスク社会論を土台にしたスポーツ研究は、これから開拓されてよいものと考えられる。本研究プロジェクトは、ベックの提示した研究アジェンダを忠実に進めるものではないが、ベックのリスク社会論を参照点とするスポーツ研究という意味では、ジュリアノッティの問いを引き継ごうとするものである。こうして2020年度の研究プロジェクトでは、ベックのリスク社会論を参照点とする日本のスポーツ界の分析を構想するに至った。

具体的な対象については、まず、バブル崩壊以降のマクロな社会変動を分析することで、個人の人生に降りかかる生活リスクを論じる研究が一つの潮流になっていたことに着目した⁵⁾。これは個人がいかにか社会によって翻弄されるようになったのかを問題化する研究である。この中で問われていたことの一つとしては、年功序列制と終身雇用制を特徴とする日本型企業が不安定化したことによる個々人の人生上の生活リスクである。これを敷衍するという意味でベックのリスク社会論を下敷きにして、日本型企業スポーツと企業スポーツ選手の人生上の生活リスクという研究課題を着想するに至った。

2年間の本研究プロジェクトでは、「スポーツとリスクに関する文化論的研究」として、主としてスポーツ人類学とスポーツ社会学の領域でリスク研究を進めるための若干の概要を提示するにとどまった。今後の課題として、具体的な事例を掘り下げることを通し

てリスクとスポーツの研究を進めることができればと考えている。

註・引用および参考文献

- 1) ベックの理論の全体像については伊藤美登里『ウルリッヒ・ベックの社会理論ーリスク社会を生きるということー』勁草書房、2017年を参照。
- 2) 例えば、鈴木宗徳編『個人化するリスクと社会：ベック理論と現代日本』勁草書房、2015年、pp.1-2。
- 3) 例えば、2004年の『社会学評論』の特集で「「個人化」と社会の変容」が設定された（「特集〈「個人化」と社会の変容〉」日本社会学会編『社会学評論』第54巻第4号、2004年）。その後も、社会学に関連する学術誌においてベックのリスク社会論や個人化論を主題とした特集が組まれている。
- 4) Richard, Giulianotti. Risk and Sport: An Analysis of Sociological Theories and Research Agendas. *Sociology of sport Journal*. 2009. 26(4) : 551.
- 5) 頻繁に取り上げられているものとして、苜谷剛彦『大衆教育社会のゆくえー学歴主義と平等神話の戦後史ー』中央公論社、1995年；橘木俊詔『日本の経済格差ー所得と資産から考えるー』岩波書店、1998年；佐藤俊樹『不平等社会日本ーさよなら総中流ー』中央公論社、2000年、山田昌弘『希望格差社会ー「負け組」の絶望感が日本を引き裂くー』筑摩書房、2004年がある。

(受理日：2021年2月26日)